

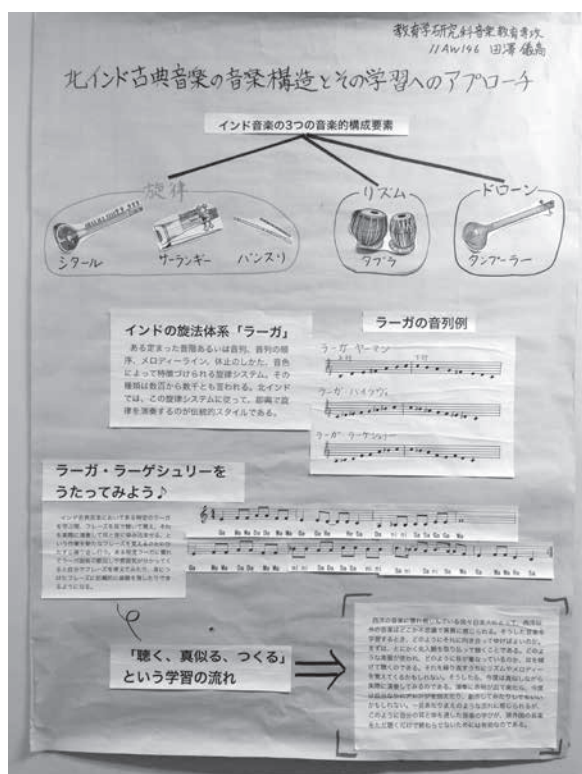
学生発表会

北インド古典音楽の音楽構造とその学習へのアプローチ

音楽領域

田澤儀高

1. 当日のポスター



2. 研究背景

近年、世界の諸外国の音楽の学習の重要性は強調されてきてはいるものの、実際の現場は諸外国の音楽を教える環境が整っているわけではなく、西洋の音楽を中心に学んできた教師がほとんどであるために教師自身も十分な知識と技術を備えていないということなどが課題である。そのため、広く有効に活用できる題材の研究などが活発に行われていくことがのぞまれる。

3. 発表の概要

本研究では、インド音楽の音楽科における教育的な可能性に期待して、研究の対象を北インド古典音楽とし、その学習方法の試案を行っている。

北インド古典音楽は、リズム、ドローン、旋律という3

つの音楽的要素から成り立っている。理論的な面では、旋法体系のラーガとリズム周期のターラがインドの音楽を特徴づけていると言える。北インド古典音楽では、ラーガの規則に従い即興的に旋律を奏で、そのラーガのムードをつくり出していくことが伝統的なスタイルである。ラーガとは定まった音階あるいは音列、音列の順序、メロディーライン、休止のしかた、音色によって特徴づけられる旋律システムである。その種類は数百から数千とも言われる。

インド古典音楽において、ある特定のラーガを学ぶ際、フレーズを耳で聴いて覚え、それを実際に演奏して耳と体に染み込ませる、という作業を新たなフレーズを覚えるごとにひたすら繰り返し行う。ある程度ラーガに慣れてラーガ固有の節回しや雰囲気が分かってくると自分でフレーズを考えてみたり、身につけたフレーズに即興的に装飾を施したりできるようになる。このように一見あたりまえのような、聴く、真似る、作るという学習の流れは、楽譜を持たない諸外国の音楽では、自分の耳と体を通した最も自然な学習の流れと言える。耳で聴いて覚えて、それを真似て、自分で新たに再創造するという流れは、音楽科の授業においても、諸外国の音楽をただ聴くだけで終わらせないためには有効なのである。

4. 発表実施報告

今回の発表では、ポスターの内容に沿って、インドの代表的な旋律楽器であるシタールの実演を交えながら、インドの音楽の構造とラーガに関する紹介を行った。発表を聞く側にとっては、やはり実際に音を聴くということがより納得のいく理解につながったようである。それでも、ラーガとはいかなるものかを正確に伝えるのは極めて困難であった。ラーガは説明の仕方によってはたいへん複雑でとっつきにくいものになってしまう。学校で実際に授業を行う際にも、本質を歪めずに、いかにわかりやすく伝えるのかを今後十分に検討していかなければならない。